The Saint of Brave - BAANGAAN -

はつい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The Saint of Brave - B A A N G A A N -

【Nコード】

N2252Q

【作者名】

はついで

【あらすじ】

数年前に他サイトに掲載した作品の加筆修正です。

そう言えばブレイブポリスが結成されるまであと少しですねえ。

某ゲーム勇者シリーズ、【勇者聖戦バーンガン】を原作を壊す事なくアレンジしてみました。

ゲーム中のネタバレになる可能性もありますので、ご注意ください。

キミに勇気を……。

合言葉は『ブレイブチャージー!!』

序 く意思の交錯く

宇宙。

広大無比な広がりつつけるその世界。

そんな宇宙にも終わりが訪れる。

しかし、終わりがあれば始まりもあるという事。

全ての始まり。

世界は混沌に包まれていた。

何も構築されていない世界。

天と地、光と闇、聖と邪・・・

あらゆるものは定義も持たず、あらゆるものが溶け合っていた世界。
無の時代。

やがて、二つの波紋が生じた。

その波紋は世界に広がり、境界をつくり、

そして、一つの意味となり、思念体となった。

その意思の名は「アスタル」

聖なる名。

その意思は全世界に心を広げた。

そしてもう一つの意味。

「グランダーク」

絶対たる悪という名。

「アスタル」と「グランダーク」

この二つの意思は、互いの属性ゆえに幾多の戦いを繰り広げた。
そして・・・

争いによって乱れるこの世界を安定に導く為、

アスタルは勇者達の協力を得て

グランダークを封印し、宇宙を創造した。

「生命のビックバン」

やがて時は流れ、宇宙は生命と心に溢れた。

「アスタル」の名のもとに……。

だが、大きな揺らぎと共に宇宙に波紋が広がるのだった。

アスタルによって封じられていた「グランダーク」の目覚めの時であつた。

心は飛ぶ、光となって……この蒼き星に。

そして今、その英雄譚は幕開けを迎える。

新番組予告！(お約束) (前書き)

やっぱりアニメと言えば、アイキャッチと予告だよね！

新番組予告！（お約束）

新番組予告！

あの勇者シリーズに新たな勇者が加わる！

僕、芹沢 瞬兵。

明日は待ちに待った海浜ドームでのVARS全国大会なんだ！
幼馴染の奈々子とクラスメイトと大会の会場へ。

僕の相手は親友の洋。

相手が洋でも手加減はなしだからね！

けど、突然大会の会場に見たこともないメカの大群が・・・

奈々子！危ない！

その時、僕達の前に光が舞い降りた。

次回！勇者聖戦バーンガン！

【勇者降臨！】

君のそばに勇気を！

ブレイヴチャージ！！

新番組予告！（お約束）（後書き）

お約束ですが、ナニか？

秀困気って大事でしょでしょ？

【勇者降臨！】：Aパート

前日からワクワクしていた。

遠足の時みたいだ。

少年はそう思った。

顔が緩んで自然にニヤける。

『瞬兵、アンタ何時迄起きてんの？』

年の離れた姉、愛美まなみの言葉にも気の抜けた返事を返した。

『そんなんで、明日の大会負けるなんて事になるなヨ。』

それはわからない。

彼、芹沢せりざわ瞬兵しゅんぺいは姉のその言葉に否定はしなかった。

相手が相手だからだ。

でも、負ける気はなかった。

この日の為に瞬兵も自分のVARSヴァルスを調整してきたからだ。

【VARS】とは、- Variable Robot System - 変形機構を持ったロボットの事だ。

元々は宇宙開発用の作業・探査ロボットとしても目的で作られたのだが、

宇宙という次世代、未来の開拓分野を未来の担い手である子供達に託そう。

そのような開発者の意図によって実用化の前に玩具として販売されたのである。

無論、それは爆発的な人気と共に子供達に受け容れられた。

明日はそのロボットバトルの決勝トーナメント戦なのである。

でも、瞬兵も負ける気はなかった。

スカイブルーのスポーツカー。

瞬兵のVARS・・・これは幼馴染の菜々子ななこの亡くなった兄が作ってくれたものだから・・・だから、だから負けられない。

宇宙が大好きだった優しいお兄さん、姉の恋人だった人。

気が強い姉が唯一涙したのが、彼の死んだ時だった。

瞬兵はその時、何も出来なかった自分が悔しかった事を覚えている。だから、瞬兵はVARSの大会に出る事にした。

少しでも姉が元気になれば……。

自分の本当の兄になるかも知れなかった人が作ったVARSが強い事を証明してやりたい。

そんな事を思いながら瞬兵は眠りに落ちてゆく。

その夜、幾数の星が流れていった事を瞬兵は知る由もなかった。

翌日はとても良い天気で瞬兵は部屋の蒸し暑さとカーテンの隙間から、

差し込む日の光で目を覚ましたのを思い出していた。

決勝トーナメントは思ったよりも楽に抜けられた気がしていた。

もつとも……。

「瞬兵のヤロー、生意気にオレ様に勝ちやがって！」

クラスのガキ大将、千葉 大地と戦った時は少し怖かった。

「全く大地さんのVARSがいくら不恰好だからって。」

「友貴！なんだと！」

大地に吊るし上げられているのは、腰巾着の池上 友貴だ。

「ばっ、VARSはこう、エレガントじゃないと……。」

そう言うと、友貴は自分のVARSを大地に見せた。

パーツがゴテゴテと付いた金色のVARS……は、とてもエレガントと言えない。

言うならば、そう……。

「悪趣味。」

同じクラスメートの熊谷 知世が呟く。

「そうよ、悪趣味、可愛くないわ！」

クラスのマドンナ、成予のVARSは全身ピンクで、ご丁寧に赤いリボンまで付いている。

これが可愛いというのだろうか……甚だ疑問ではあるが。

「そう言う友貴だつて、成予だつて、坂下に負けてんじゃないかねえかよ！」

「ウルサイ!!!」

がやがやと喚いている四人を止めた少女。

黄色と白のボーダーシャツにブルーグレーのキュロット、見るからにボーイッシュな格好。

彼女が瞬兵の幼馴染の菜々子だ。

「次は瞬兵と洋の決勝戦なんだから！静かにしてないと、蹴っ飛ばすわよ！」

会場に少女の声が響きわたった。

「あはは、相変わらず元気だなあ、菜々子ちゃんは。」

菜々子声をステージ上で聞いていた少年が、自分と向かって呟いた。

「きゃーッ!!!坂下くうくんつ。」

黄色い声援。

「洋だつて、すごいモテモテじゃない。」

「あは・・・あはは・・・。」

紫のパーカーにデニムのジーンズ。

洋と呼ばれた少年は、乾いた笑いのまま頭をかく。

「でも、洋と決勝戦をする事になるなんてね？」

「オレは負けないよ？」

「僕だつて・・・菜々子も見てるんだ。」

菜々子と洋は瞬兵の幼馴染だ。

何時も三人でいた。

男勝りの菜々子。

それに引きずられる瞬兵。

止め役の洋。

何時も三人一緒に遊んでいた・・・菜々子の兄が死ぬまでは。

彼女にとって・・・いや、瞬兵にとっても自慢のお兄さんの死はとてつもない大きな衝撃だった。

彼女の傷は大きく・・・そして深かった。

それは瞬兵や洋の二人では、どうにも出来ない程に・・・。

瞬兵がVARSの大会に出るのに一番反対したのが、その証拠だろう。

瞬兵のVARSは言わば、兄の形見なのだから。

見れば当然兄を思い出す。

そしてその大きすぎる死という現実を。

そんな二人のやりとりを見たからだろうか、瞬兵がVARSを始めると、

程なく洋も彼の後を追うようにVARSを始めた。

瞬兵が泣きながら未完成だったVARSを作りあげたのを見ていたから・・・

見ていて、何も出来なかったから・・・。

何時も冷静で物静かな洋の中には、そういう友達想いの心に溢れているという事を瞬兵も知っていた。

ともかく、二人の間柄は一言では言い表せない程、仲が良いという事は確かだった。

「只今より、VARS全国大会決勝戦を開始しまあーす！」

スポンサーである赤黒のTAKORAのスタジャンに同じロゴが入った帽子を後ろ向きにかぶった少女が、ステージに出てくる。

ウェーブの入った茶色の髪、いかにもイマドキというフリースの似合う少女だ。

「Aブロックからは、優れたバランス性能を発揮していた芹沢 瞬兵君の蒼きVARS！」

それに対するはBブロック、そのスピードは今大会随一、ここまで危なげなく勝ち抜いて来た

坂下 洋君の紅のVARS！全国の頂点に立つのはどちらか！！」

一際大きな歓声の中、二人はVARSの起動スイッチを入れる。

渦のような歓声の中、瞬兵は自分の心臓の音がまでがはっきりと聞こえるのを感じた。

心臓の音、その振動が自分の身体を直接動かしているようだった。。。

「Lead y!」

二人は向き合って構える。

(ヒロ。。。。)

二人の前に挙げられた手が鋭くおろされる。

「Fight!!」

二人は自分たちのVARSをバトルリングに放った。

【勇者降臨！】：Bパート（前書き）

やっぱり昔の”完全子供向け”勇者モノと魔女っ子モノって、教育
上いいと思う。

世界名作劇場と日本昔話の次くらいに。

× 奈々子 菜々子に修正・統一。

【勇者降臨！】：Bパート

二人の放ったVARSはリングの中央に向かう。

そして、激しく激突！

・・・するはずだった。

だった。という事はそうはならなかったという事だ。

閃光と轟音、そして、衝撃。

瞬兵は自分の身体が吹き飛ばされ叩きつけられるのを

自覚する事なく気を失った。

『瞬兵・・・。』

呼ぶ声がある。

『瞬兵・・・。』

(・・・兄さん・・・?)

懐かしい声。

『宇宙から見た地球はビー玉みたいなんだぞ？蒼い蒼い綺麗なガラス玉みたいなんだ。』

覚えている・・・死ぬ前に・・・死ぬずっと前に話してくれた・・・。

『宇宙から見ればちっちゃなガラス玉・・・この中にな、何千万、何億もの生き物が生きている・・・すごいよな？大切にしくつちやいけないよな？』

壊れ易いガラス玉だからこそ、皆で住む星だからこそ、幼な心に大事な事だと理解できた。

この人がとても好きになった。

『お兄ちゃん！』

(泣き声・・・菜々子のだ・・・。)

兄が死んだ時、菜々子は大泣きした。
学校も休んだ。

ご飯も食べなかった。

あの気の強い姉ですら……。

瞬兵はそこで目を覚ました。

その瞬兵の目に飛び込んだのは炎。

それから、追いかけるようにして熱さ。

瓦礫の山。

「……ヒロ……？」

瞬兵は辺りを見回す。

先程まで目の前にいた親友の名。

しかし、瞬兵は自分の親友を視界に入れる事は出来なかった。

「菜々子……そうだ！ 奈々子はっ？！」

彼の視界には人は映らない。

目に入るのは、瓦礫、炎、瓦礫、炎。

「……シユン……ペ……イ……。」

「誰?!」

幻聴ではない。

確かに自分の名を呼んでいる。

「誰かいるのっ！」

瓦礫の山、その向こう側に向かって叫ぶ。

ふと、小さな……瞬兵の手に収まるくらいの光の玉が

彼の目の前で静止する。

「……君が呼んだ……の？」

衝撃的な映像の中だったからかも知れない。

あるいは先程の夢の中にいる心地が続いていたからなのかも知れない。

瞬兵は自然と驚かなかった。

「そう、私が君を呼んだ……芹沢 瞬兵。 勇気ある者よ……。」

「勇気……ある……者？」

「そうだ……時間がない……世界が闇に飲まれる前に……グ
ランダークが世界を滅ぼす前に……力を……。」

勇気ある者？ 滅ぼす？ 力？

あまりにも謎だらけで話しが飲み込めない。

「私の名前はバーン。今、地球は悪の意志グランダークによって危機に晒されている・・・瞬兵よ・・・私に力を・・・君の勇気を分けてくれ・・・私の名を・・・。」

目の前に浮遊する蒼い光の球体。
まるで夢の中で見た地球のような。

「・・・そんな・・・何だか・・・わからないよ・・・。」

瞬兵の手が震える。

炎と瓦礫の中でひとりぼっちの瞬兵。

「僕に・・・勇気・・・なんて・・・。」

孤独と寂しさと不安の中で、涙が溢れてくる。

そんな自分に勇気などあるはずがない。

（あるなら・・・あの時、僕はただ眺めている以外の事が出来た・・・僕には、そんなモノなんてない。）

瞬兵はそう彼（？）に告げようと、言葉を口から紡ごうとした。

「瞬兵くっ!!！」

「菜々子?!！」

聞き慣れた声。

そして人影が近づいてくるのがわかる。

やはり、菜々子だ。

菜々子は瞬兵の姿を確認すると、その歩みを速めた。

「?!！」

ミシリ。と菜々子の頭上で嫌な音がする。

何かが耐え切れなくなって軋む音。

コンクリートに亀裂が走る音だ。

そして・・・。

何故かと問われたら、きつとわからないと答えるだろう。

わからない。

が、身体が自然に動いていた。

この後に訪れるだろう運命を受け入れたくはなかったから・・・。

「菜々子！」

天井が崩れ落ちる瞬間に何か、理由のない衝動が彼の背を押す。瞬兵は菜々子に向かって走り出した。

力強く足を踏み出す彼の頭の中に、言葉が閃光のように駆け巡る。

-ユ・ウ・キ・ヲ・！-

手を伸ばした瞬兵の手が、菜々子の腕をしっかりと掴む。

力の限りに叫ぶ声。

「バーンっ！！」

瞬兵から放たれた一筋の蒼い光。

光が一点に向かう中、天井が崩れ、瞬兵が菜々子の上に覆いかぶさるようにその身体を投げ出す。

・・・痛みはない。

それを感じる事なく、生を終えたのかも知れない。

しかし、うずくまった瞬兵はそれに気づいた。

心音が聞こえる・・・自分のではない。

自分の下にいる菜々子の心臓の音だ。

「大丈夫か？瞬兵。」

遙か頭上からかけられた声に瞬兵は顔をあげ、そして驚いた。

透き通る晴れた大空のスカイブルーに金色の角。

輝く深緑の宝石を胸に抱いた巨人。

瞬兵はそのそびえ立つ巨人の姿に見覚えがある事に気づいた。

【蒼いVARS】

そう、それは瞬兵が操るあのVARSのファイターモードの姿、そのもだった。

「瞬兵、これが君の勇気のカだ。」

巨大なVARSから発せられた声は、あのバーンの声に間違いなかった。

「バーン？」

「そうだ。近くにあった、君の想いが一番こもったモノを身体に使わせてもらっている。君の勇気のカが、私に今の姿をとらせたのだ。」

「バーンはゆっくりと自分の肩に乗っている瓦礫をどかす。

「瞬兵、ここは危険だ。この建物からすぐにも出るのだ。」

瞬兵は辺りを見回すと、菜々子を抱え、引きずるようにして建物から避難したのであった。

そして、この日より瞬兵は本当の勇気というものが何なのかを知っていく事になるのだった。

次回予告！（お約束）

次回予告！

今日はどうなるかと思ったよ！

まさか、僕のVARSが巨大ロボットになるなんて……。

バーンの力で菜々子を助けられた僕だけだ。

僕が勇気の源なんて、何かの間違いなんじゃ……。

だって、僕はこんなにも泣き虫で弱虫なのに。

でも、バーンは『本当の勇気ある者は、勇者はそついう事じゃない。

』って言うんだ。

本当の勇気って？

そんな中、グランダークの手先、ガストが悪の活動を開始した。

戦うなんて、僕には無理だよ……！！

次回！勇者聖戦バーンガン！

【勇者の使命】

君のそばに勇気を！

ブレイヴチャージ……！！

次回予告！（お約束）（後書き）

とりあえず、ここでお終いです。

需要とか全く関係無く、勢いだけで書きたかった作品なので・・・
とりあえず、満足です。

二次は、リクエストがあれば（他ジャンルでも）書いていきたいと思えます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2252q/>

The Saint of Brave - BAANGAAN -

2011年4月28日12時13分発行